

— 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

沢田瞬太は、有明学院高校陸上部の三年生で駅伝の選手。高校駅伝の全国大会である昨年末の「都大路」で活躍し、今回は、都道府県対抗の全国男子駅伝に福岡県の代表として選ばれ、そのチームの第一区走者を任された。以下は、その駅伝を走りながら、回想している場面である。

瞬太に陸上をすすめたのは、小学校のときの教頭先生だった。交番からの帰りのことだ。交番に呼ばれるのは、初めてのことではなかった。もつと本格的に、警察署で取り調べを受けたこともある。

夜更けの公園で爆竹を鳴らす。線路に置き石をする。人の家の屋根から屋根へと飛び移る。盗みや人に手出しをすることはしなかったが、瞬太は地域でも有名な「悪がき」のヒットウ格だった。そして、最後までつかまらない逃げ足の速さでも有名だった。

「お前は、その足の速さを生かせ。おれが話をつけてやる」

そして連れていかれたのが、有明学院高校の陸上部だった。陸上部の監督が教頭先生の後輩に当たる人だったらしい。

熊みたいな人だな。

それが、熊沢という監督に対する第一印象だ。色黒で、がっしりとした「1」は、名前のとおり、のっそりとした熊みtainな感じだった。

瞬太は初めて行った有明のグラウンドを一周走らされた。全力疾走で一周走ると、熊のような監督は、こう言った。

「家族に心配ばかりかけとらんで陸上をやれ。お前が頑張っている姿を見たら、お母さんも喜ぶぞ」
だが瞬太は、そんな熊沢にふてぶてしい目を向けた。

「おれの母ちゃん、目、見えねえし」

瞬太の母親は、全盲だ。若いころは、かすかな視力があつたものの、結婚をするころには、光も感じなくなっていたらしい。当然、生まれてきた瞬太の「2」も知らない。それでも母親は、父親の手助けを得ながら、瞬太を育ててきた。料理も毎日作ってくれるし、時間はかかるが、掃除や洗濯もできる。

母親は失われたキノウを、工夫と努力でなんとか補いながらも生活している。生活にシショウはないし、瞬太のほうもそれが普通だと思っていた。

① 小さなころの瞬太は、母親のことが大好きで、買い物や病院への付きそいなど、自分にできることはなんでも手伝った。

そんな気持ちだが、少し変わってきたのは、小学校四年生くらいのことだろうか。

もともとやんちゃなところがある瞬太が、ちよつといたずらをしただけで、周りの人が大げさに「3」をひそめることに気がついたのだ。しかも、自分になされる注意には、全部「お母さん」という単語がくっついていて。

「お母さんを悲しませるな」

「お母さんに申し訳ないと思え」

「お母さんは一生懸命なのに」

「お母さん」

「お母さん」

自分のいたずらと、母親の目が見えないのは、なんの関係もないのに、いちいち母親を持ち出されるのは、うっとうしいと感じるようになった。

高学年になると、いたずらの質はちよつと派手になってきた。知恵も「4」もついた分だけ、当然と言えば当然だが、瞬太に関しては、違う評価がなされた。ほかの子も一緒にやっているのに、一人だけ、

「瞬太くんのお母さんは、目が見えないから」

と言われるのだ。母親の目が見えないことをいいことに、子どもが悪さをしていると言いたいのか、目が見えない母親だから、満足に子どもを育てられないと言っているのかはわからなかったが、どちらにしても腹が立った。

だが、それよりも悔しかったのは、そんな世間の評価に対して母親が、なにも言い返さなかったことだ。貼られたレッテルを受け入れたように押し黙り、そればかりか、人の目を必要以上に気にするようになった。家にこもりがちになり、それまでかかさず来てくれていた授業参観にも、運動会にも来てくれなくなった。寂しさと悔しさで、瞬太は「5」がかきむしられるようだった。

そして、決定的なことが起こった。

瞬太が小学校六年生のときのことだ。瞬太は、物陰に隠れるようにして携帯電話をかけながら、泣いている母親の姿を見た。

相手は担任の先生のようなだった。担任の先生からの電話は、固定電話にかかるのが常なので、自分のほうから電話をかけたのだろう。母親は「6」を忍ばせるようにして、こう言っていた。

「瞬太のいたずらが過ぎるのは、私の目が見えないからでしょうか」

きいた瞬間、瞬太はみぞおちの内側に、とがった氷を押し当てられたような気がした。

自分はそこまで、母親を追いつめてしまったのか、と思ったからではない。その言い方に、母親が自分の側に立って来ていない気配を感じたからだ。

母親は自らのハンディをバリエードにしながら、おれを責めている、と思った。先生から「お母さんのせいではないですよ」と、言っただけだったのだろう。母親は、自分だけ助かろうとしている。そう感じた。

今では、あのとときの母親の苦しみが、多少なりとも理解できる。母だつてぎりぎりの精神状態で、誰かに救いを求めたかったのだろう。そうしなければ、とてもやっていけなかったのだろう。

だが当時の瞬太には、ただただつらいことだった。だからますます荒れた。母とはほとんど口をきかなくなった。初めて会った熊沢は、事情を知らなかったのか、「おれの母ちゃん、目、見えねえし」という瞬太の反論に一瞬黙った。が、すぐににたと、笑った。そしてこう言った。

「高校の県大会からは、ラジオ中継もあるぞ」

瞬太は目を見開いた。その目が熊沢の瞳に吸いつく。太い眉の下のどんぐりまなこ。口は笑っているのに、磁石みたいに真つ黒な目は真剣そのもので、どこか不気味なほどだった。

沢田瞬太、十二歳。ここが、陸上地獄への第一歩だった。

次の日から瞬太は、小学校が終わると、その「7」で有明学院に通うことになった。放課後の練習に参加することになったのだ。

昨年末の都大路を終えて、瞬太は母親に手紙を書いた。

母親には、ずつとわだかまりを持っていた。陸上に明け暮れていた中学時代は、それにかこつけて、あまり家にもいなかった。そして逃げるように有明学院の寮に入った。

けれども逃げたからといって、わだかまりが消えたわけではない。試合に勝っても、記録が伸びても消えはしなかった。むしろ、勝てば勝つほど、強くなればなるほど、自分の中で大きくなっていった。

ただし、向けられる方向は明らかに変化している。自分に向けられているのだ。同時にあんなにとがっていた母への気持ちも、ずいぶんやわらかくなっているのに、瞬太は気づいている。

試合で結果が出るようになって、気持ちに余裕ができたのかもしれない。寮生活を始めたことも大きい。

なにしろ瞬太にとっては面倒くさくてしょうがない掃除や洗濯が、母親にとっては見えなくてもできることだと気がついたのである。

ともかく母親に、ありがとうと言いたくなった。そして、心配ばかりかけてきたことを、あやまりたくもなかった。瞬太の新しいわだかまりは、それらを素直に表現できないことになっていた。

点字は、小学校のころ練習をしたことがある。ふだん母親は、パソコンの音声ガイドを使って文章を作るが、相手の目も見えないときには、やはり、点字を打って手紙を書くこともある。

家にある点字キットの使用法を母親に教えてもらい、小さなころはよく母親に手紙を書いた。

プラスチック製の点字器に紙をはさんで固定する。そこにセリウの点筆で点を打っていくと、点字で文章が書ける。

母親に手紙を書くのは、十年ぶりだった。

いつもおうえんありがとう。おかげで、ここまでつよくなれました。でも、これからがんばります。いつまでもげんきで。

時間がかかるので、短文しか書けなかったが、もともと文章を書くのは苦手な瞬太にとっては、ちょうどよかった。

④ 正月に帰ったときに渡した。あんなうれしそうな母親の顔を見たことはなかった。

母親は手紙を指先で読んだ。さもないとおしそうに。くりかえし、くりかえし。瞬太が家にいた三日間、肌身離さずさわっていたので、寮に戻るころには凹凸がなくなっているのではと、思ったくらいだ。

あ、まずっ。

瞬太はあわてた。17番と28番のナンバーカードが見えていないか。長野の後藤と兵庫の選手がいつの間にか、前に出ていたらしい。

瞬太は二人の間から前を確認する。テレビ局の中継車から、カメラはまだはっきりと見えて安心する。

瞬太はラジオの前にいるはずの両親を思った。瞬太の家では、応援をするときには、テレビの音を消し、ラジオで

音声を補うスタイルだ。そして父がときどき映像を説明する。こうすると、まるで《
 は目を細める。》

注目選手になると、アナウンサーも情報を持っていて、名前や様子を細かく伝えてくれているはずだ。

瞬太は先ほど自分かけられた、沿道えんどうからの応援を思い出し、こぶしに一瞬力をこめた。都大路で結果を出した自分も、おそらく注目選手になっているのだ。ラジオもきちんと伝えていいるだろう。

残り一キロのカンバンが見えた。

⑤ さあ、ここから、連呼してくれ！ おれの名前を絶叫ぜつきょうしてくれ！

瞬太は、スパートをかけた。

(まはら三桃みつと『白をつなぐ』による。ただし、途中を省略した部分がある。)

問一 本文中の「1」「7」を補うのに最もふさわしい語を、それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ただし、同じ記号は一度しか使えないものとします。

ア 声 イ 口 ウ 目 エ 眉 オ 顔 カ 手 キ 足 ク 胸
 ケ 体力 コ 体つき サ 心

問二 —— 線部①と同じような母親とのつながりを感じさせる一文を、本文の後半からさがし、その最初の五字をぬき出して答えなさい。

問三 —— 線部②について。「どちらにしても腹が立った」のはなぜだろうか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分がやっていたはずなのに、母親の目が見えないことと結びつけて言われることが、我慢できなかったから。

イ ほかの子も同じことをしているのに、まるで自分一人だけが悪いことをしているように評価をされてしまうから。

ウ これまで自分の母親も普通だと思って暮らしてきたのに、目が見えないということで差別されていると感じたから。

エ 大好きな母親を悲しませることはしてこなかったつもりなのに、母親を責めたてるような言い方がとてもつらいから。

問四 —— 線部③に関連して。瞬太の「わだかまり」は、どういうものからどういうものへと変化したのだろうか。できるだけくわしく説明しなさい。

問五 —— 線部④について。このときの「母親」の気持ちを想像して、くわしく説明しなさい。

問六 本文中の《 》を補うのにふさわしいことばを考えて、五字以上十字以内で答えなさい。

問七 次の一文は、もともと本文中にあったものである。元にもどすのに最もふさわしい箇所をさがし、その直前の五字をぬき出して答えなさい。

かなうことなら、母親自身にもその顔を見せてやりたいくらいだった。

問八 線部⑤について。このように願う瞬太の気持ちを、くわしく説明しなさい。

問九 線部 a、e のカタカナを漢字に直して書きなさい。

二 次の文章は、筆者が多くの人に呼びかけて、寄せられた文章を編集してできた『転換期を生きるきみたちへ』のまえがきの一部である。これを読んで、後の問に答えなさい。

この世に「最低の学校」というのがあるとすれば、それは教員全員が同じ教育理念を信じ、同じ教育方法で、同じ教育目標のために授業をしている学校だと思います（独裁者が支配している国の学校はたぶんそういうものになるでしょう）。でも、そういう学校からは「よきもの」は何も生まれません。これは断言できます。とりあえず、僕は、そんな学校に入れられたら、すぐに病気になるでしょう（病気になる前に、窓をやぶっても、床に穴を掘っても、脱走するとは思いますが）。僕は①「閉所的」な空間に耐えることができません。どんな場所であれ、そこで公式に信じられていることに対して「それ、違うような気がするんですけど」という意思表示ができる権利が確保されていること、それが僕にとっては、呼吸して、生きていけるぎりぎり唯一の条件です。

勘違いしないで欲しいのですが、「僕の言うことが正しい」と認めて欲しいわけではないのです。僕が間違っている可能性だってある（だってあるどころかたいいていの場合、僕は間違っています）。それでも、みんなが信じている公式見解に対して、「あの、それ、違うような気がするんですけど」と言う権利だけは保証して欲しい。「僕が正しい」とみんなに認めて欲しいのと違うのです。ただ、正しい意見に対して、「それは違うと思う」と言っても処罰されない保証を求めている、それだけです。

教師も生徒も、全員が同じ正しさを信じていて（信じることを強いられていて）、異論の余地が許されていない学校は、知的な生産性という点から言うと、最低の場所になるでしょう。そういう学校から、多様な個性や可能性をソッパにえた若者たちが次々と輩出してくる②ということは決してないと僕は思います。というのは、知的な生産性というのは「正しい／間違っている」という二項対立とは別のレベルの出来事だからです。

ほんとうに新しいもの、ブレイクスルーをもたらすものは、いつだって「思いがけないもの」です。そんなものが存在するとは誰も思っていなかったものです。それが、そんなところから何かが生まれるなんて誰も思ってもいなかった場所から生まれ出てくる。そういうものなんです。いつだって、そうなんです。ほんとうに新しいものは、思いもかけないところから生まれてくる。

ですから、知的生産性という点からすると、学校が多産であるためには、「そんなところから何か価値あるものが生まれて来るとは誰も予測していなかった場所」がたくさんあることが必要だということです。薄暗がりとか、用途のわからない隙間とか、A地点からB地点にゆく場合の最短ルートとは別の迂回ルートとか、坐り込んだ気分よく立てなくなってしまうソファとか、意味もなく美しい中庭とか……そういう「何の役に立つのかよくわからないもの」たちが群生しているのが知的空間としては極上だと僕は思います。これは僕が長く生きてきて得た経験的確信です。

ですから、この本もまた一つの学校のようなものだと思って読んで頂ければ僕としては、とてもうれしいです。この本には「公式に共有された正しいこと」はありません。書き手たちの唯一の共通了解点は「中高生たちに今すぐ伝えたいことがある」という現状認識だけです。それだけは共通しています（それが共有されなければ、そもそも寄稿してくれません）。でも、「伝えたいこと」は全員ばらばらです。僕はそれでいいと思います。というか、「それがいい」と思います。

この学校では、いろんな先生が、いろんな教科を、いろんなクチヨウで教えています。教育方法も、教育目標も、全員が違います。共通するのは、全員がみなさんの知的な成熟を願っているということです。

タイトルにある「転換期」というのは、世の中の枠組みが大きく変化する時代のことです。みなさんの事情に即して言えば、転換期とは「短期間に成熟することを求められている時代」のことです。③すぐ大人にならないと生き延び

ることが難しい時代のことです。そういう状況にみなさんは投げられています（気の毒ですけど）。

もつと安定的な時代でしたら、大人たちの言うことを、わからないなりに黙って聞いて従っていれば、それほど大きなリスクを負うことはないのですけれど、転換期は違います。転換期というのは、大人たちの大半が今何が起きているのかを実は理解できていない状況のことです。だから、大人たちが「こうしなさい」「こうすれば大丈夫」と言うことについても、とりあえず全部疑ってかかる必要がある。今は「マジョリテイについて行けばとりあえず安心」という時代ではないからです。社会成員の過半数がまっすぐに崖に向かって行進しているということだっておおいにありうるのです。

ですから、この本に書かれていることだつて（今僕が書いているこの言葉を含めて）、みなさんは基本的には「全部疑ってかかる」必要があります。「大人の言うことだから信じる」という態度も「大人の言うことだから信じない」という態度も、どちらも単純すぎて、知的成熟にとつては何の役にも立ちません。だから、まず疑ってかかる。でも、疑うというのは「排除する」とか「無視する」ということとは違います。「頭から信じる」でもなく、「頭から信じない」でもなく、⑤信憑性をとりあえず「かつこに入れて」、ひとつひとつの言葉を吟味するということです。そうすればおそらくみなさんは「なんとなく、身にしみ入る言葉」と「なんとなく、違和感がする言葉」を識別できるはずです。それくらい判断力は生物である限りはそなわっています。原生動物だって、「自分を食べに来る捕食者」と「自分が食べる餌」の区別くらいはできます。原生動物に出来ることが人間に出来ないはずはない。まずはそこから始めて欲しいと思います。

本の内容については、とりあえずどうでもいいです。理解できなくても、共感できなくても、別に僕はいいです。それよりも、世の人たちは「中高生に向かって言いたいことがあれば言って下さい」というリクエストにずいぶんいろいろな文体で、いろいろな回答をしてくるものだ、という事実をまずそのまま受け止めて欲しいと思います。そして、⑦この多声的な環境こそが僕たちからみなさんへの「贈り物」なのだということを（いつか、でいいですから）

分かってくれたらうれしいです。

(内田樹『転換期を生きるきみたちへ』による)

* ブレークスルー……難関を突きやぶること、飛躍的に前進すること

* マジヨリテイ……多数派

問一——線部 a c のカタカナを漢字に直して書きなさい。

問二——線部①とは、学校に関して言えばどのような学校のことか。本文中——線部①よりも後の部分から五十
字前後の表現をさがし、初めと終わりの五字をぬき出して答えなさい。

問三——線部②について。ここでの「二項対立」とはどういうことを表しているか。最もふさわしいものを次の中
から選び、記号で答えなさい。

ア 対立する二つの要素のいずれかにあてはめて、物事を整理しようとする事。

イ 対立する二つの要素を合わせた新たなものとして、物事を理解しようとする事。

ウ 物事を善悪の二つに分類して、どちらを選ぶか個人個人考えさせようとする事。

エ 物事を善悪の二つに分類せずに、あいまいな状態で受け止めようとする事。

問四——線部について。筆者が本文中で述べている学校は、どのような点で「最低の学校」ということになるの
か。本文前半の内容をふまえて分かりやすく説明しなさい。

問五——線部③について。ここでの「大人」とは、どのような人のことか、説明しなさい。

問六——線部④・⑤について。「全部疑ってかかる」と「頭から信じない」の違いは何か、説明しなさい。

問七——線部⑥とはどういう意味か。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 信じてよいものかどうかは永遠に分からないと考えて、

イ 信じてよいものかどうか、ひとまず判断を下さないで、

ウ 信じられるものであると取り急ぎ仮定して話を進めて、

エ 信じられるものであると考え、何よりも敬意を払って、

問八——線部⑦について。筆者が、「多声的な環境」を「贈り物」だと考えているのはなぜか。その理由として最
もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 様々な考え方を示し、期待と愛情を伝えることで、読者の学ぶ意欲が飛躍的に高まっていくはずだから。

イ 様々な考え方を示し、あえて混乱させる方法をとることで、結果的には読者が知性を磨くことになるから。

ウ 様々な示された考え方に触れることで、読者は自分の将来が可能性に満ちあふれていると実感できるから。

エ 様々な示された考え方を主体的に受け止めることで、読者が新しいものを生み出す可能性が生じるから。

中学
国語
解答用紙

受験番号

[illegible]

問一	1	
	2	
	3	
	4	
	5	
	6	
	7	

問

問

問四

問五

--

問六

問八

問九

a
つて
b
えた
c

問
一

S

問
三

問四

問五

問六

問七

問八